



宗像市に遺る戦場の痕跡

『新修宗像市史』原始・古代部会から

宗像周辺の戦場

太平洋戦争の敗戦から、75年目の夏を迎えました。

近代の戦争において、宗像市域では、日露戦争のときに沖ノ島沖の玄界灘で日本海海戦（1905年）があったこと以外、特に目立つ戦闘が発生することとはなく、国内の被害が際立つ太平洋戦争末期でも、潜水艦による商船への攻撃以外に大きな被害を受けることはありませんでした。

しかし、宗像の東西に位置する北九州市域（当時は小倉市など5市）と福岡市は、アメリカ軍の空襲を受けたことで多くの被害を出しました。特に北九州市域は、世界遺産「明治日本の産業革命遺産」にも登録されている八幡製鉄所をはじめ、門司港、造兵廠（陸軍の兵器工場）、連隊衛戍地（部隊が永久駐屯する地）など、明治時代以降に国の重要施設が集中して所在していた地域です。そのため、太平洋戦争ではアメリカ軍の標的とされ、1944年6月16日に中国大陸の奥地から飛来した47機のB29による空襲を受けます。

北九州防空のための兵力配置

これは、B29による初めての日本本土空襲で、その後敗戦までつくづく本格的な空襲のはじまりとなる出来事でした。

日本軍も北九州市域の重要性は理解しており、多くの高射砲部隊を集中配置するなど、結果はともかく空襲に対する備えは行っていました。宗像市域は、1944年後半頃、北九州を中心とした日本軍防空部隊の最も前線となる地域になっていました。これは当時、敵機の飛来は中国大陸からと考えられており（実際に日中戦争中の1938年には中国軍機が九州に飛来し、ビラを投下した）、それに対応した部隊の配置によるものでした。田野、池田、平等寺、武丸の丘陵地には、照空隊という夜間に照空灯（サーチライト）で敵機を照らし出す役割の部隊が配置されており、この部隊は、敵機を照らす照空灯のほかに、敵機の発するエンジン音を捉える聴音機（巨大な補聴器のようなもの）、電気を起こす発電車などを持ち、それぞれの機材を設置するための壕（たて穴を掘り、周囲に土盛りを

したもの）や、陣地内を兵士が移動するための交通壕（塹壕のような溝）、将兵が起居する兵舎などを築造しました。



日本軍が使用した照空灯と高射砲



照空灯照射のイメージ（1944年のドイツ・ブレーメンで撮影）

（写真出典：AUSTRALIAN WAR MEMORIAL [左]044856 [右]080254）

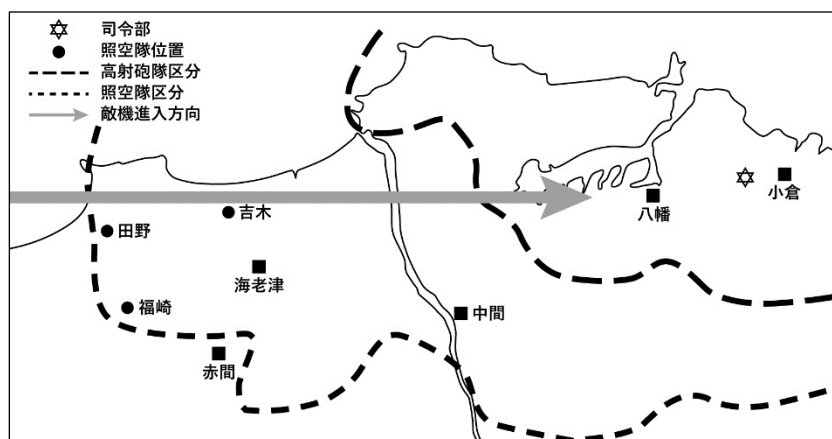
宗像市に遺る陣地跡

実は、宗像市内にその時の陣地の跡が今も遺っている場所が数か所あります。このような陣地の跡は、戦後75年人知れず放置されていますが、足を踏み入れてみると、照空灯を設置したであろう直径約8メートルもある壕や、聴音機を設置したであろう深さ2メートル以上の壕、兵士たちが通った数十

メートル以上の長さの交通壕が、当時の姿のまま遺っています。また、平成12・13年に実施した平等寺原遺跡の発掘調査では、照空灯を設置した壕の跡が発見されました。

宗像市域は、戦争で直接受けた被害が少なく、まちを見渡しても記念碑以外に戦争に関連するものを見つけることは容易ではありません。しかし、山林のなかに遺る陣地跡からは、宗像もかつて戦場の一部になっていたことがはっきりと分かります。

（原始・古代部会 池田拓）



1944年11月頃の宗像周辺の部隊配置